

## 教会暦と聖書の流れ

年間第 26 主日の「二人の息子」のたとえ (マタイ 21・28-32) や第 27 主日の「ぶどう園と農夫」のたとえ (マタイ 21・33-43) 同様、これも神殿の境内で、当時のユダヤ人の指導者やファリサイ派の人々を前にして語られたたとえ話です。前の 2 つのたとえ話と同じように、神の国への招きを受け入れなかった人々が批判されています。

## 福音のヒント

(1) ルカ 14 章 15-24 節によく似たたとえ話がありますが、ルカでは、エルサレムへの旅の途中、イエスがファリサイ派の人の家に招かれたときの話になっています。ルカの内容のほうがイエスの生前の状況に合っているとと言えるでしょう。マタイでは、後の時代の展開に合わせてさまざまな要素が付け加えられているようです。マタイの特徴は次の点です。

(a) ルカでは「ある人が盛大な宴会を催す」というだけですが、マタイでは「ある王が王子のために婚宴を催す」という話になっています。「婚宴」は聖書

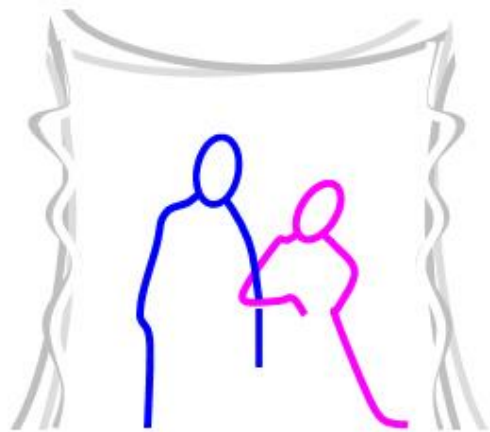
の中で、神と人とが一つに結ばれる終末的な救いのイメージであり、マタイはこの点を強調しています。「ある人」が「王」となっているのも、最後の裁き(11-14 節)のイメージとつなげるためでしょう。

(b) ルカでは「招いておいた人々」のもとに僕(しもべ・単数形)が 1 回だけ遣わされますが、マタイでは複数の僕が 2 回遣わされています。ここでマタイは、旧約の預言者たちとキリストを信じる教会による 2 つの呼びかけを考えているようです。

(c) ルカでは、招いておいた人々が拒否したのを知って、怒った主人はすぐに他の人々を招きますが、マタイでは、人々はただ拒否するだけでなく遣わされた「家来を捕まえて乱暴し、殺して」しまいます。そして、怒った王は「軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った」という過激な展開になっています。これは前のたとえ話(先週の福音)の展開とよく似ています(マタイ 21 章 35, 41 節)。マタイは、紀元 70 年に起こったエルサレムの滅亡を、キリストを受け入れなかったユダヤ人に対する神の罰のように見ているのでしょうか。だとすると、ここでも先週の話同様、マタイはたとえ話の中に現実の歴史的出来事を読み込んでいることとなります。

(d) ルカではその後、2 回の招きがあります。まず貧しい人や障害者が招かれますが、それでもまだ席があるので、主人は「無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいしてくれ」と言います。これはイエスによる神の国への招きを連想させます。一方、マタイでは 1 回だけで「善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになった」となっています。マタイは教会に招かれた人々のことを考えているようです。

(e) 11-14 節はルカにはありません。これについては後ほど考えましょう。



(2) このたとえ話の中で、なぜ招かれた人々は来ようとしなかったのでしょうか。マタイでは5節に「一人は畑に、一人は商売に出かけ」とあるだけですが、ルカ14章18-20節では、「最初の方は、『畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させていただきます』と言った。ほかの方は、『牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。どうか、失礼させていただきます』と言った。また別の人は、『妻を迎えたばかりなので、行くことができません』と言った」というように、詳しい理由が語られています。彼らは嫌だとは言っていません。でもそれ以上に優先することがあると考えたようです(断る口実を見つけることはいくらでもできるのです)。彼らは結局、招かれたことの素晴らしさ・ありがたさを本当には感じていなかったのだと言わざるを得ないでしょう。今のわたしたちは神の招きをどう感じているのでしょうか。

(3) ルカでは貧しい人や障害者が招かれるところに特徴がありますが、マタイは『見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。』そこで、家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来た(9-10節)と言います。ここには、マタイの教会についての見方が反映しているのでしょうか。教会とは「良い麦と毒麦」が共存している場(マタイ13章24-30節)なのです。18章でも「迷った羊」である罪びとをいかに取り戻すか、罪を犯した兄弟をいかにゆるすか、ということが大きなテーマでした。マタイ福音書の著者が、徴税人マタイであったということを現代の学者は疑問視しますが、この福音書の著者自身が「自分はゆるされた罪びとである」という意識を持っていたと考えると分かりやすいかもしれません。

(4) 11節以下で、町の大通りからたまたま連れてこられた人が「礼服を着ていない」といって主人に責められるのはどう考えても不自然です。この礼服のたとは本来、10節までのたとは別の話だったものをマタイが結び合わせたのでしょうか。マタイにとって「罪びとも招かれている」ということの素晴らしさは確かです。しかし同時に「この素晴らしい招きにふさわしく応えるか、否か」ということも、決して忘れてはならないもう一つの大きなテーマなのです。

それはただ単に倫理的に立派な生き方をするというようなことでしょうか。むしろ、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」(マタイ5章44-45節)とあるように、罪びとをも愛する神の心に応えて生きることなのではないのでしょうか。つまり、ここで言う「礼服」とは、神の愛を受けて人を愛することだと言えるでしょう。マタイ福音書はイエスの最後の説教の中でそのことを明確に示しています。「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ」「はっきりしておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(マタイ25章35-36, 40節)。